

せたかむい

発行・古平町史編纂室
古平町文化会館 42-2590
第131号・平成12年8月1日

年表で読む

古平の歴史

《38》

■北海道の教育

北海道は移住者が住み着いてからの歴史が浅く、教育についても本州と同じように行うことは無理でしたので、北海道での教育は規則もゆるく、教科の内容も程度の低いものでしたが、このような変則的な教育の在り方も、その後、次第に改善されていきました。

明治十三年一月、開拓使は北海道に即した教育を行うことを目的に、それまでの小学校の規則を改正しました。

学年ではなく六級から一級まであって、入学すると六級に入り、級は六か月ごとに前・後期に分かれていました。教科は修身・読本・習字・算術・体操などで、前・後期の終わりにには定

期試験があり、合格しなければ進級できませんでした。

しかし当時の北海道では、比較的教育の進んでいた海岸部でも就学率が低く、家業を手助けしなければならぬ子どもたちも多かったことから、四年から六年までの間に教育を終えるという方法もありました。これは『変則小学校規則』といわれ、浜中学校もこの規則に沿い、明治二十年四月、北海道庁から新しく小学校規則が公布されるまで続けられました。

■浜中学校の教育

変則小学校規則によって学校の修業年限は四か年とし、これを前・後期に分けて八級としました。入学すると八級前期生となり、年二回の学力試験によって

合格者は進級します。試験は厳正で、同じ学区内にある小樽量徳学校ほかの※訓導が来て行っていました。

※ 明治十三年に学校教員を訓導と改め、等級によって給料が定められました。

当時、小樽ほか高島・忍路・余市・古平・美国・積丹の六郡は同じ第八学区内にあり、教育体制をどうするか、児童にどう教えるかなど、教育の諸問題を解決するため『小樽外六郡学事会』をつくりましたが、この研究会を年に一度開かれていました。

小樽量徳学校は小樽周辺の学校の中心的な存在でもあり、先の『小学校規則』による授業を行っていたのは、札幌県下でも量徳学校を入れてわずか三校でした。

量徳学校は、当時の小樽を象徴するようなモダンな近代的な校舎でもあり、その後も伝統ある小学校として名前を知られていました。

■浜中学校と改称

明治二十年、北海道庁令によって『小学校簡易科教則』による教育を行うことになり、校名も浜中小学校と改称しました。

簡易科は修業年限が三か年、学年は九月一日から翌年八月三十一日までで、一日の授業時間は三時間でした。休日は日曜や祭日、神社のお祭り、年末と年始、そして仕事で忙しい季節には、五十日以内の休みをとることもできました。

△前後期ごとに卒業となっています▽

卒業証書

證



札幌縣民

篠井 才

八年十月

小樽第六級前期
卒業証書

明治廿年八月

札幌縣教育委員会

濱中小学校

大正六年

9/30 積丹行きの川崎船があるというので、伊之君と熊さんはリングの荷造りに忙しい。

10/5 午後一時から、役場で農合品評会の役員会があるので行く、五時に帰る。

10/6 イカ漁、一昨日辺りから五百〜六百宛漁があるので浜も活気づいている。イカ道具を買う客もボツボツ来る。

10/7 リング買いが来る、十九号を樹で売った、九十円に売れた、少し玉は小さかったし色付きも悪く、風の心配もあったので売ることにした。

10/10 快晴、衛生検査も合格、農会から品評会に出すものを入れる袋が配布される。今年は寒かったので品質が悪く賞に入りそうなのは無い。今夜六時から、堀ビヤホールの改築開店披露祝いがあり招待される。八畳四間通しの新座敷、立派な出来だ、客は二十人余り、酒肴が出てから、芸者踊りがあり余興があり、十時に散会した。

10/14 今日、団体で美国の

農産品評会を見学するため、八時に役場に集合する、役員十二名、ほかに因主人、原田さん、馬車に乗り行く。途中の山々はすっかり色づいている。十時ころ到着、茶菓を馳走になる、古平から見ると大分劣っている。褒状授与式に参列し午後一時ころ帰ったが、私は商用のため平尾、⊗八嶋などに寄り、五時ごろ歩いて帰宅する。

高野名幸作さんの日記から



【32】

10/15 秋晴れの好天気だ、小樽から竹井というリング屋が来る、六号、七号、四十八号、ムラサキを混みで売ることにした。およそ八千斤（四、八〇〇キロ）はあるだろう。共進会も迫って来たので、出品するリングを選ぶべく、伊之君と農園へ行く、今年是一般に玉も色も悪い。六号、七号、四十八号、四十九号、ムラサキ、旭とナシの八種を選定した。

10/20 第二回古平農産品評会で会場の小学校へ行く、会場はずいぶん立派に出来ていた。二階の休憩室は菊花、幕などで飾られていて賑やかだ。十時に開会式をやり、売店も出ていてソバ屋は大繁盛だった。

10/24 今日珍しく小春日和だ、品評会も盛会のうちに終わった。農事発展上益するところが大きからう。私のところでは、リング一等賞に七号と旭の二種が入り、古平で第一等の成績であった。予想外の好成績で大いに喜ばしいことだ。

10/25 小樽の竹井で、出面を頼んでリングをもぐことになった、六号は玉はちょっと小さいが色づきが良く、味も良い。四十九号は色づきが良くなかった。

10/26 今日出面を入れ、これでリングもぎは全部終わっ

た。今日の分はハネものも入れて百九十円になった。樹売りだと百三十円ぐらいだろう。六十円はもうかったことになる。時化て来たが、リングを積んだ川崎船は余市まで行ったので安心だ。今日まででリングの売り上げは九百五十円になった。まだあるので千三百円ぐらいにはなりそうだ。

10/27 風雨がずいぶんひどくなってきた。リングをもいでしまったので幸運で逢った。夜、小樽と佐渡へ送るリング七箱を荷造りする。

10/28 第一回古平観桜会の日だ、時化もおさまり晴れてきた。六時半、合図のラッパが鳴った、分会員四十五人と町長、ほか有志三十五人、計八十人からの人数だ、会旗を先頭にして勇ましく進む。途中でリングが三個ずつ配られる、会場のヨシヤチで記念撮影をする、昼食は鮭汁であった、酒も出る、曇ってきたので三時ごろ引き揚げたが途中で雨に降られ閉口した、四時、家に着いた。

以下 次号に続く

わが輩は犬である ② 昭四三記

『あわや毒殺の体験記』

富山市 高橋 藤蔵
(元・稲倉石鉱業所勤務)

どのくらい過ぎたろうか。
ご主人の大声で意識を取り戻した僕は、助かったという喜びで一杯だった。

ふと見上げると、さつき見た白い車の中に、今朝一緒に山を駆けずり回った友達の「しろ」と「タロ」と「ロボ」が口から泡を出し、息もせずグツタリと横たわり、その側で、ご主人と白衣を着た人間が何やら話をしていた。

白衣の方は保健所の職員らしかったが、僕には人間の話などわかるはずがなかった。

「屠殺してもいいですか」

「は、はい」

「では、注射で往生させますが二十分ほど苦しみますので家

族の方は見ない方がよいでしょう」

「今、マンジュウで死にそうになったんですが、もっと苦しみますか」

「そうですね。体質にもよりますが、目玉が飛び出すほど苦しむ犬もいますヨ。この犬なら、体格もよいので相当苦しみ暴れるかも知れません」

「そんなに苦しむんですか」

「たぶんネ」

「……………」

「じゃア、あそこの木のところまで犬を連れ行ってくれませんか」

「……………」

「暴れないように、木の根にその太い鎖でしっかりと繋いで

下さい」

「……………」

ご主人は、青ざめた顔で僕と鎖と白衣の人間とを何度も何度も見まわした後、震える声でこう言った。

「やめて下さい」

「やめるんですね。うん。実は私たちが屠殺などしたくはないんです。可愛いからといって飼いながら、大きくなりすぎたからとか、噛みついたからとか、手に負えなくなった



と

からと言って簡単に屠殺してしまうのは、人間の得手勝手というものです。犬が悪さをするのは放し飼いをする飼主が悪いのです。可愛ければ可愛いほどキチンと鎖で結んでおくべきです。愛犬を屠殺する人間には動物を飼う資格がありません。正直のところ屠殺を頼む人を見ると『コンチクショー』と思いますヨ。これからは犬を大切にやって下さい」

白衣の人は諭すようにこう言い、主人と別れた。

後でわかったことだが、今朝の豪華な食事は、三年間一緒に過ごした僕と家族の別れの宴だったのです。

さて、それからの僕は、愛の鎖に繋がれ些か不自由になったものの、家族との絆が一層深まり、決まった時間にご主人や子供さんと散歩をし、決まった時間に食事をする規則正しい毎日がつつき、家族の一員として充実した日々をおくっている。

— この稿おわり —

徴用

《国家総動員法》で 小樽製缶会社へ動員

竹 内 コ ト

私は昭和十三年のころ、徴用で小樽製缶会社に行ったことがあります。沢江から何人か一緒でした。手宮の斉藤産婦人科跡の建物が地方から行った人たちの宿舎でした。今もある、あの運河の橋を渡って会社へ行つたことを覚えています。

会社へ入るとまずタイムカードを押して、広い食堂で一人ずつ金属製のお盆に盛られた食事を運んで来て食べます。それから各自の職場へ向かうのです。

私は一階にあるブリキ倉庫に廻されました。ここには六十歳ぐらいの渡辺さんというおじさんが主任さんで、私たちのほか若い男工さんもありました。

私たちの仕事は、荷台車に載せて運ばれてくるブリキ板を一枚ずつ点検することです。車には一メートル四方ぐらいのブリキ板が積み上げられていて、それを一枚ずつ裏表に傷が無いか

どうかを点検するのです。一日中、立ちつきりですべてしていると疲れて、腕が上がらなくなってしまうこともあります。

祭典に寄せて思うこと

渡 辺 ハ ツ エ

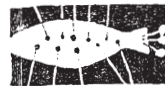
好天に恵まれて琴平神社の例祭もつつがなく執行できたことは、関係者は勿論のことでしょうが、私たち町民にとっても大きな喜びでした。

春からの不順な天候で暑い夏とは思われませんでした。早や半歳余が過ぎてしまいました。お盆も近づき、ご先祖様をお迎えしなければなりません。

数年前の夏は、千葉県に住む息子が仕事の都合で帰省できま

戦事中はアスパラやコーンの缶詰工場にも行きましたが、ここでも生産が急がれるので、ほとんど休憩時間もないほど働きづめでした。

戦事中は、私たちは国家のためというこでただ夢中で働いてきました。今にして思えば、銃を持たないまでも兵隊さんと



なったら遊びに行くからね。もうすぐだから待っててね。」と指折り数えて待っていたのに、私も孫もがっかりしました。

私は息子の家族へと、冷凍して置いた魚介類を宅配便で送りましたが、これでわが家の冷凍庫は空っぽになりました。

息子夫婦は仕事から留守がちなので心配していましたが、三日目に電話が来て、開口一番、「荷物を受け取りました。いろいろと送ってもらって……」、嫁さんに代わり「今夜のわが家

一緒にの思いで、女性といえどもみんな一生懸命に働きました。終戦のときは製缶工場にいましたが、ブリキ倉庫で働いていた皆さんの優しい思いやりは忘れられません。私と同年齢でしたが所在の分からなくなってしまう方がおり、健在で居られますようにと願っています。

の食卓は豪勢です。」すぐ孫に代わると、「これからタコとイカをいただきます。」聞いていて、私はこみ上げてくるものがありました。

「来年はきつと来てよね。待っているからね。」これだけ言うのが精いっぱいでした。

このタコは亡夫が元気でいたころに獲ってきたもので、息子一家へのささやかな贈り物となりました。テレビの上には、海上渡御に随行したときの、わが家の『健生丸』に乗った亡夫の写真が飾ってあります。祭ばやしを聞くと、健在だった亡夫が漁業に励んでいたことを思い出しております。

仏教の起り

(2)

室 谷 忠 雄

釈迦は亡くなるとクシナガラで火葬にされましたが、その遺骨は部族や王らによって八つに分けられ、それを祀るストウパ（塔）日本語の卒塔婆の原語）が各地に建てられた、と伝えられています。

日本に仏教が伝わって来てその釈迦の仏像が祀られたとき、それまで神しか知らなかった日本人の目にどのような映ったことでしょうか。

日本で、最初に仏像が造られたのは今から千四百年ほど前の飛鳥時代のことで、これを造ったのは中国からの帰化人の子孫・止利仏師（しりぶつし）という人でした。一般に飛鳥大仏といわれている釈迦如来像です。高さが三メートル近いこの銅像が完成して、建物に納めるときには入口の扉を壊して運び入れたといわれています。

また、これを造った止利仏師

はその功績によって、聖徳太子から大仁（おほに）という高い位を受けました。

この仏像は、日本で最も古く本格的な寺院といわれる法興寺、後の元興寺（もとこうじ）に祀ら

第四位

最上徳内

朝日新聞が、読者からの人気投票で選んだ結果は次のようでした。

- 第一位 植村直己
- 第二位 伊能忠敬

この1000年

日本の大冒険・探険家

人気投票！

- 第三位 毛利衛
- 第四位 最上徳内
- 第五位 堀江謙一
- 第六位 ジョン万次郎
- 第七位 間宮林蔵
- 第八位 白瀬矗

れましたが、江戸時代、この跡に建てられた安居院（あんきいん）の本尊として今も残っています。当時は、日本ではまだ「お釈迦様」といつてもまるで知識がなく、ほとんどの人たちは、仏教などという言葉は聞いたこともなかったのです。

その後、この釈迦の仏像は崇仏・排仏などの争いに巻き込まれ、たびたび災難に遭うことに

- 第九位 猿 岩 石
- 第十位 河 口 慧 海

これは人気投票ということで、江戸時代、遠く当時の蝦夷地や千島、カラフトなどを探険し、想像を絶するような苦勞しながら、調査や地図づくりに

努力した人たちが三人も選ばれています。

このせとかむいでも、最上徳内の『蝦夷草紙』を今までに四回紹介してきましたが、やはり多くの人に関心を持たれてい

なります。焼き打ちや火災などにも遭いましたが、幸い銅像でしたので信者が補修を重ね、文字通り満身創痍の姿を現在も見ることが出来ます。

この像は、飛鳥大仏としてよく知られていますが、丈六釈迦如来座像といわれ国の重要文化財にもなっています。

これが日本での仏教の始まりと思われまふ。

ることがわかりました。

最上徳内は出羽国（山形県）の農家に生まれましたが、農業を嫌って行商人や漁師をし、後に江戸に出て本多利明という学者に学び、幕府の命令を受けた本多利明に代わって蝦夷地の調査に参加しました。

その翌年、今度は単身で千島方面に向かい、ロシア人のこの地方での活動を知り、北方の重要性を幕府に訴えました。

徳内の北方に関するその知識は、後に、日本に来ていたドイツの医学者・シーボルトによって世界に紹介されています。

断章小説 「ふるさと遙か」 第13編
青春哀歌 (2)

無窮花の里

吉川 義雄

冬になれば、流水のやつて来る北の海辺の町を故郷にする海野は、十七歳で予科練に入隊したから、二十歳をすぐ目前にしても初々しい童顔で、女性の肌に触れたこともない。

八畳ほどの部屋の中央になまめく色の布団が延べてあり、枕が二つ並べられてある。

部屋に案内されたときから、海野の身体は異常な鼓動の高鳴りと震えて、彼は自分を持てあましていた。部屋の主はなかなか現れなかった。遠くで空襲警報のサイレンが鳴っていた。

遊廊での源氏名か、さくらが疲れた身体を励ますようにして自室に戻って来たのは、海野が来てから二時間余も経っていた。実戦を想定しての飛行訓練で海野も疲れていた。いつの間

にか彼は布団の上で眠り込んでいた。

人の世の人の出会いとは不思議なものである。海野も、それにこたえるはずのさくらも、深更のほんの僅かの語らいの中で、情炎は失せていた。

大白山のふもと、さくらの故郷はその近くの村で、春は無窮花が咲き競い、海はそこを離れるまで見たことがないという。

北の海。砂丘にハマナスが咲き乱れ、やがて冬と共に流水が、悲しい音をきしませてやって来ると海野は説明する。

夜明けがやって来た。海野が特攻を志願していることを言葉の端でわかったとき、さくらの形相が変わった。

「やめてッ何で死ななければならぬ。私だって何回も死の

うと思った。こんな身体にさせられて……。私は、私は必ず生きて帰って見せるんだッ無窮花の故郷に。」彼らは跳びつくようにして抱き合い、ふたり共、泣いてないで崩れるようにして身体を重ね合った。

列線の戦闘機群は試運転の音をこごうと響かせていた。敵の機動部隊が輪形陣の中央に空母を据えて、刻々と近づいていくことは昨夜から判っていた。虎の子の零戦をかき集めて特攻することも判っていた。

戦争とは何なのか。俺はどうして死ななければならぬんだ。それより死とは何なのか。

さくらとの夜以来、海野は悩み抜く日が続いた。さくらは生き抜いて故郷の無窮花を必ず見るという。俺もオホーツクの海に押し寄せる流水群を見たい。

ハマナスが光りに燃えるあの砂丘で、この世で初めて結ばれたさくらと、肩を寄せ合って心のありったけを語り合いたい。

零戦の座席に入ってから、海野の若い生命は死出の旅路とはほど遠い、遙かな故郷の、砂

丘に咲き乱れる甘い香りの花々の中に居た。「さくら、俺も帰ったよ。故郷はいいな」

次々に飛び立って行く零戦が彼の番になったとき、車輪止めを外す合図を待たずに、彼の機の下に待機していた兵は勢いよくチョークを引いた。彼の機は走り出した。

彼はまだ無限の花園の続く、美しい人との語らいの中に居た。

さくらは美しく優しかった。苦しくなるほど人恋しい砂丘も、今は光があふれていた。

海野の機体は急角度で曲がり、帽子を振って見送る厚ぼったい隊列の中に突入して行った。バリバリと翼でなぎ倒される兵たち。零戦はそのまま激走し防空壕に激突した。目くらむ閃光と爆発。一瞬の内に戦争の狂気と空しさを見せて海野の機は消えた。

その夜更け、飛行場の端に積み上げた井桁の木材が燃え盛り、その中で二十人におよぶ兵たちの遺骸が煙となった。

△この稿終わり▽

遙かなる故郷の思い出

わが闘病日記

[68]

橘 義 春

痘 (続き)

7月23日

午前、レントゲン検査、昨日の内視鏡検査の結果を、自分でアレコレ考えてみた。ガンの進行度はもう手遅れになってないか。素人の私が見ても、内視鏡カメラのモニターテレビに「アッペロバー」と顔を出していた真つ赤な腫瘍は、少しオガリ過ぎではないか。やっぱりガンでねえべか。とうとう橘一族のガンの遺伝子が私のところへ回って来たのでは——。また、ガンの出来たところはどこか。大腸で一番ガンの出来やすいところは、50%は直腸だと言われている。直腸ガンだったら、およそ人工肛門ということになりそうだ。

「アー、やだ、やだ」

それから他の臓器、肝臓や肺に転移してないか。私は予防に勝る治療はなし、ということわざがある通り、ガン予防のため健康食品を飲んだり食ったりしてきた。家の周りの菜園にも、ガン予防に効くといわれている健康野菜『アシタバ』を栽培し、毎朝のみそ汁の中へ入れ、もう10年ぐらい続けて食べている。

現在、市中の薬屋にさまざまな健康食品が売られている。ガンに効く加工健康食品は『クマ笹』『舞茸』『アガリクス茸』『サメの軟骨』『冬虫夏草』『田七人参』『靈芝』『プロポリス』などなど、数え上げたらきりがなほど売られている。また、これらの健康食品について「なぜ効く」「どう効く」

「選び方」「飲み方」まで詳しく解説している健康雑誌が、本屋の棚にずらりと並んでいる。生まれて初めて口にする健康食品であり、その知識が無いので、効き目は？ 副作用はないのか？ など、よく本を読んで納得してから飲用すべきだ思っている。

本の体験談の中に書かれている「ガンで飲んだ」「効いた」「助かった」などの過大な効果には、期待しない方がよいのかも知れない。人それぞれ体質も病気の症状も違うのだから、使用効果に差があるのは当然だろう。

私の住んでいる所は、東京のJR中央線、武蔵境駅と次の小金井駅の中間にあり、どちらの駅に歩いて行っても10分ぐらいで、生活には便利な所である。特に薬のスーパーが多く、「石を投げれば薬屋に当たる」と言われるほど、とにかく薬屋が多い。東京は昔から、「八百屋八層倍、薬屋九層倍」と言われるほど薬は値段の高いものだと思っていたが、なんと、この

ごろは土曜日になると、新聞に折り込みの、安売りチエーン店のチラシがドサツと投げこまれる。安いのは買う方としては大歓迎だ。同じメーカーの薬でも店によって売値の差が大きい。薬ももう定価で売ったり買ったりする時代ではなくなり、安売り競争がますます激しくなることだろう。

私も、身内に余りにも多いガン患者に、いずれ私の方に順番が回って来たらちょっと厄介なので、入院の三年ほど前から、健康補助食品でガンの予防に良いといわれている『プロポリス』を飲んでる。

さて、ガンに効くといわれているこの『プロポリス』が、私の期待にどう応えてくれるか、今、大きな関心をもっているところである。

—— 続く ——





吉平岬短歌会七月詠草

噴煙の三千米春耕の季なるを再度避難の農民あはれ

池田 テル

ライラック今を盛りと咲き誇る色も褪(あ)せず(あ)にこのままでゐて

田中 香苗

経習ふと寺に寄りしが介護保険また付き添ひの話きりなし

鈴木 時子

目印の桜伐られて峠路の幅員拡張工事始まる

東 美知

土盛りせし二坪の庭はチューリップのみ競ひて咲けりわが誇りなり

榊 佳代

積丹の海にせまれる断崖を埋めて黄に咲くエゾカンゾウの花

山口 スエ

背をまるめ歩む姿を気にかけて背すちのばせと男の子らの言ふ

奥山 きよみ

去年(こ)母と花殻とりしを思ひつつ満開のキリシマツツジに水やる

丹後 初江

海つばめとぶ厚苔の草深き斜面(なだ)に白き辛夷(ふし)の花咲く

竹内 コト

丈揃ふ若き春菊摘みとりて今宵緑のフルコースにせむ

堀 典子



吉平ホトトギス会

栃茂り尊徳像と素十句碑 斉藤 波留

銭湯の帰り幼な日氷水 山口 悦子

花の苑天にひろがるチューリップ 越野 敏雄

烏賊釣灯燃ゆる日本海に住む 大和田 絵伊

青芝にホールインワン憩ふベンチ 福井 幸平

紫陽花の一ト雨ごとに藍深き 関口 勝志

夏負けか出歩くことも遠くなり よしざきり

前を行く跳足の長き娘(こ)ギャル達 仲谷 比呂古

春宵の舞ひの稽古や凜然と 越野 清治

大方は茶髪ばかりの神輿舁(みこし) 室谷 弘子

石井 愛子

黄泉(よみ)の旅義姉(あね)が召されて兄の許に

賑やかに祭りが来ると今昔

娘(こ)と孫と婆の背を越す孫に笑み

渡辺 ハツエ

目と耳と腰に年輪さいなまれ

度を過ぎた質素儉約侘びし過ぎ

調子つ外れ孤独な老いの憂さ晴らし

